

後肢重度創傷にモイストヒーリングを応用した黒毛和種牛の一症例

西播基幹家畜診療所

○宇崎敬与 野口 等 小田修一 玉井 登

菅 保礼 柳沢義人 森本啓介

黒毛和種育成牛の左中足骨を覆う軟部組織の大半が骨膜から剥離および欠損した重度創傷にモイストヒーリングを応用したところ、骨の再生と軟部組織による創の閉鎖を得ることができた。

材料および方法

症例は2012年4月17日生まれの黒毛和種育成牛。2013年5月7日人工授精にて受胎。2013年5月31日コンクリート製の水飲み場に仰臥位ではまり込みもがいた結果、左中足骨外側を覆う軟部組織の縦20cm、幅3cmが欠損し、骨膜の露出を認め、骨膜全面に損傷がみられた。さらに欠損部に連続していた軟部組織が摩擦により骨膜から剥離しており、中足部内側のみにおいて正常な骨と軟部組織の接着がみられた。皮膚欠損部の面積が広く縫合不可能であったためモイストヒーリングを実施した。モイストヒーリングの被覆材として食品包装用フィルム（初診～受傷8日目）、大人用紙おむつ（9日目～123日目）および生理用ナプキン（124日目～223日目）を使用した。同時に、衝撃吸収材として医療用脱脂綿を、被覆材の補強として伸縮包帯または人用サポーターを使用した。また全身処置として抗生剤投与を受傷8日目まで続け、その後88日目までは被覆材交換毎におこなった。

結果

初診時創面を洗浄後、食品包装用フィルムにて被覆し、モイストヒーリングを実施した。受傷9日目に創面から大量の滲出液排出を認めたため、被覆材を大人用紙おむつに変更した。124日目に肉芽に押し上げられた骨片を認めたためX線検査を実施し、中足骨から遊離していることを確認後、骨片を抜去した。159日目中足骨がすべて肉芽で覆われた。210日目までに計17回の被覆材の交換を実施した。223日目モイストヒーリングを終了した。

受傷3日目に自力起立可能となり、100日目頃には食欲が安定し、150日目頃には跛行も消失した。現在直径4cmの皮膚欠損部を残すのみとなり、妊娠も順調に継続している。

考察

軟部組織の大半が骨膜から剥離していた重度な創傷にも拘らず、症例が跛行を残さず治癒したのは、事故発生時に中足部外側へ摩擦による負荷が多くかかり、尾側に集中している靭帯や腱に断裂がなかったためと考えられた。モイストヒーリングは外科的侵襲が少なく処置時に与えるストレスが比較的小さいと考えられ、アニマルウェルフェアの面からみても優れており、器材が安価であり、かつ方法が簡便であることから治療費や労力が抑えられ、畜主や獣医師にとっても選択しやすい治療法であった。さらに皮膚の欠損が広範囲に及び、縫合不可能な創傷に対して積極的に応用できる治療法であった。